



## 「いのちの電話」で思うこと

「福岡いのちの電話」理事

**待井 弘道**

(西部ガス株式会社 取締役常務執行役員)



平成27年4月から「福岡いのちの電話」の理事を仰せつかりました。恥ずかしながら「いのちの電話」の存在すら知らず、何をすればいいのか見当もつきませんでした。が、とにかく、理事会、行事には極力出席しようと心に決めてお引き受けしました。

理事会等でいろいろなお話を聞くうちに、相談員の方をはじめ多くの方々の善意で成り立っている団体・活動であるということを感じています。会社では労務関係の仕事が長く、その経験から、労務管理の基本は「部下に関心を持つこと」だと思っています。また、人は、「見ようと思わなければ見えない、聞こうと思わなければ聞かえない」とも思います。まさに、相談員の皆さまが行われていることがそうではないでしょうか。相談者に関心を持ち、声を聞き、心を聴こうとしていらっしゃるのだと思います。部下と接する時には、言葉や声の調子だけでなく、表情や動作なども合わせて部下の状況を確認できますが、相談員の皆さんは言葉と声の調子だけで相談者の状況を把握されるのですから本当に大変な活動だと思います。

話は変わりますが、今年4月の熊本地震に際し、安全のために熊本地区のお客さま宅への都市ガス供給を緊急停止しました。その後の復旧作業では、全国のガス会社からの応援をいただきながら、毎日早朝から深夜までの作業が約2週間続きました。被災地熊本の社員も同様に復旧作業にあたっておりましたので、保健師さんを常駐させ社員の相談に応じていただきました。毎日多くの社員がいろいろな相談にやって来ました。保健師さんは、丁寧に傾聴し社員の相談に対応してくださいました。

ある日、本社から人事部長が熊本支社を訪問した際のことです。保健師さんが「自分の家も相当な被害を受けていること」「高齢の親の体調が優れないこと」等々、自分の状況や心境を吐露されたそうです。保健師さんは、相談に来た社員に自分の悩みを話すことはできませんし、同じ被災者である上司や同僚にも話せなかった、自分自身の心の中に溜まったものを吐き出す場所がなかったのだと思います。

福岡いのちの電話の広報誌等を拝見すると、相談員の方が「いのちの電話の研修や行事の際の相談員同士の交流の中で、いろんな話や意見交換をするうちに自分自身の悩みが軽くなったり、相談員を続けていく支えになった」と感想を書かれていました。熊本の保健師さんのケースと通じるものがあるように思えました。

毎回、いのちの電話の会議や行事に出席するたびに、いろんなことを感じ、考えさせられます。私の役割は、後援会に入っている企業への働きかけをすることだと思います。企業には企業の事情がありますが、「福岡いのちの電話」の活動を少しでも多くの方に知っていただき、その存在価値を高められるよう努めて参りますのでよろしくお願い致します。

